

6.4 教育成果のあり方

進捗状況報告

各科目の合格基準作りおよびシラバスへの明記については、コンセンサス作りの方法論や実施方法をカリキュラムWGで検討している。不適切な評価の点検については、各科目の受講者数、合格率、平均点等の統計情報を資料化し、カリキュラムWGで問題の分析を行っている。

長期的な視点からの教育システム作りに関しては、「非常勤講師との懇談会」「同窓会」「同窓会役員会」「産学連絡研究会」等の公式な定例会合を通じ、カリキュラムや教育制度に関する学外者の意見を聴取し検討するよう努めている。成績上位者の顕彰は、2006年度入学生より、GPA制度に基づいて実施している。成績優秀者の履修単位数制限緩和については全学的に検討を開始した。

学内第三者評価

厳格な成績評価が行われる仕組みとして、各科目の合格基準作りおよびシラバスへの明記などが課題とされているが、そのためのコンセンサス作りの方法論や実施方法が検討される途上にあるなど、2005年度の改善の具体的方策に照らすと、GPAの活用を除き、全体的に取り組みが途上にあるものが多い。

なお、特別委員からは以下の意見があった。

一般にGPAは、次の2点で利用されることが多いようである。

(1) 履修登録しても受験せず、単位を取得しなかった科目の成績を「不可」と同じにみなすことによって、学生が過剰な登録をしなくなる。またその結果、クラスサイズが適正化される。

(2) GPAの成績がふるわない学生に対し、早めに学修や生活面の指導をすることにより、留年や退学にいたる事態を予防する。

学生のGPAに対する認識が低いようであれば、進級の要件にすることで(1)の効果が出てくるのではないかと。

北海道大学などでは、GPAを活用することにより、学生の適正履修が進み、理系学部の実験実習科目の予習が十分におこなわれるようになったとか、図書館の利用が格段に多くなった、などの好結果が得られているそうだ。